

A large red flag with a white border on the left side, featuring a red diamond-shaped emblem at the top left corner. The flag is the background for the text.

中国のプロレタリア
文化大革命

(第九集)

北京 外文出版社

中国のプロレタリア文化大革命

(第九集)

外文出版社

北京

プロレタリア文化大革命を

最後までおしすすめよう

『人民日報』『紅旗』社説

(一九六七年一月一日)

一九六六年にわが国でまきおこったプロレタリア文化大革命は、二十世紀六十年代のもっとも偉大な出来事であった。この革命は、わが国の社会主義革命を新しい段階に発展させた。この革命は、国際共産主義運動の歴史に新しい紀元をきりひらいた。

レーニンの指導のもとで、偉大な十月社会主義革命は、プロレタリア革命の新しい時代をきりひらいた。十月革命は革命の暴力で権力を奪取し、プロレタリアート独裁を樹立するという問題を解決して、全世界のプロレタリアートに偉大な手本をうち立てた。だが、当時においては、社会主義国でプロレタリアートとブルジョアシートのどちらがどちらに勝つかという問題、プロレタリアートの政権を保持する問題、プロレタリアート独裁を強固にする問題、資本主義の復活を防止する問題など一連の問題を解決することができなかった。あろうことか、十月革命のふるさとに、現代修正主義グループによる党と国家の指導部のつとりという事態がおこり、そのために最初の社会主義国ソ連は、資本主義復活の道をあゆむことになった。この教訓は、プロレタリアートが権力を奪取したのちに、権力を保持しうるかどうか、資本主義の復活を防止しうるかどうか、国際プロレタリアートの

新しい中心課題となったことを物語っている。それはプロレタリアート独裁の国家の命運を左右するばかりでなく、全世界のプロレタリアートと被抑圧民族の革命事業の命運をも左右する。毛主席がみずからおこし、指導しているプロレタリア文化大革命こそ、この偉大な歴史的意義をもつ問題を解決し、全世界のプロレタリアートに新しい偉大な手本をうち立てるものである。

プロレタリア文化大革命は、わが国の社会主義革命の新しい段階である。生産手段所有制の社会主義的改造が基本的になしとげられてからも、社会のブルジョア右派と党内の一握りのブルジョアジーの代表者は、搾取制度の滅亡に甘んぜず、たえずプロレタリアートに狂暴な攻撃をくわえ、資本主義を復活させようとたくらんできた。社会主義社会における階級と階級闘争についての毛主席の学説にみちびかれて、わが党はプロレタリアートとその他の革命的大衆を指導し、ブルジョアジーの挑戦に勝利の反撃をおこなってきた。今回のプロレタリア文化大革命は、プロレタリアートとブルジョアジーおよびわが党内におけるその代理人との全面的なたたかいである。

はげしい階級闘争を経て、わが国のプロレタリア文化大革命は偉大な勝利をおさめつつある。

一九六三年、毛主席みずからの指導のもとにわが国でおこなわれた、演劇改革を中心とする文学・芸術革命は、事実上、プロレタリア文化大革命の発端であった。

一九六五年十月を起点として毛主席がみずからおこした反党、反社会主義の『海瑞の免官』にたいする批判、「三家村」反革命グループにたいする批判、旧北京市委員会の反革命修正主義指導者にたいする批判は、大規模なプロレタリア文化大革命の大衆運動のために、世論を準備し、道をきりひらいた。

一九六六年六月一日、毛主席は、北京大学の全国最初のマルクス・レーニン主義的大字報の発表を決定し、プロレタリア文化大革命の烈火をもやし、資本主義の道をあゆむ党内の一握りの実権派に打撃をあたえることを重点とする大衆運動をまきおこした。一群の資本主義の道をあゆむ実権派、ブルジョアジーの反動的学術「権威者」が暴露され、大衆はかれらの威光を徹底的にたたき落とした。わが国の政治生活、社会の姿、人びとの精神的様相には、深刻な変化があらわれた。また、この偉大な大衆運動のなかで、おびただしい勇敢な革命の闘将が、つぎつぎと姿をあらわした。

革命の道はまがりくねったものである。なん億もの大衆が毛主席に代表されるプロレタリア革命路線にみちびかれて、自覚して立ちあがり、革命をおこなっているとき、党中央で仕事をしていた一、二ないしは数人の責任者は、毛主席が北京にいなかった機会をとらえて、ブルジョア反動路線をうち出し、毛主席の正しい路線に反対した。かれらと、ブルジョア反動路線をあくまでおしすすめていた責任者たちは、反動的なブルジョアジーの立場に立って、かれらの力が一時およぶ範囲で、ブルジョアジー独裁を実行し、なんとかしてすさまじい勢いのプロレタリア文化大革命運動をおさえつけようとした。この連中は、是非を転倒させ、黒白を混同させ、革命派を包囲攻撃し、異なった意見をおさえつけ、白色テロを実行して、みずから得々としてほこり、ブルジョアジーの威光をさかんにし、プロレタリアートの志気を衰えさせた。

ちょうどこうした重大な時機に、われわれの偉大な舵手毛主席はみずから中心となって党の第八期中央委員会第十一次総会を召集し、『中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命についての決定』を制定して、ブルジョア反動路線を深くつつこんで暴露した。この反動路線は資本主義の道をあゆむ党内の一握りの実権派をかば

い、かれらとグルになつて悪事を働き、革命的大衆運動を弾圧し、革命的大衆と対立し、とどのつまりは、中国を資本主義復活の方向へみちびいていこうとするものであった。

党の第八期中央委員会第十一回総会は、毛主席に代表されるプロレタリア革命路線の勝利を宣告し、ブルジョア反動路線の敗北を宣告して、プロレタリア文化大革命を正しい軌道にのせた。これは社会主義革命の途上における毛沢東思想の新しい偉大な勝利である。

第八期中央委員会第十一回総会ののち、毛主席に代表されるプロレタリア革命路線は広範な大衆の革命的熱情と結びつき、たちまちブルジョア反動路線にたいする大衆的な批判があらわれ、プロレタリア文化大革命の新しい高まりがあらわれた。この新しい高まりをしめす重要なめじるしは、ほかでもなく、紅衛兵運動と革命大交流である。

紅衛兵はプロレタリア文化大革命のなかで生まれた新しい事物である。六、七月の紅衛兵が出現したばかりのころは、まだ数十人にすぎず、当時、ブルジョア反動路線をうち出したものから「反動組織だ」と中傷され、打撃と包囲攻撃をうけた。しかし、偉大なプロレタリア革命家毛主席は、紅衛兵というこの新しい事物を目にするど、ただちにその無限の生命力を見てとり、そのプロレタリアートの革命的造反精神をたたえ、断固とした熱烈な支持をあたえた。毛主席の声は春雷のようにひびきわたった。紅衛兵はきわめて短期間のうちに、全国の各学校と多くの工場、農村で発展し、意気さかんな堂々たる文化革命の大部隊となった。こうして、学校における闘争、批判、改革は社会における闘争、批判、改革に発展した。革命的紅衛兵は搾取階級の四旧を大いにうち破り、プロレタリアートの四新を大いにうち立てた。かれらは、ブルジョア反動路線批判の先頭に立った。かれ

らは前衛としての役割を果たしたのである。

革命大交流もプロレタリア文化大革命のなかで生まれた新しい事物であり、偉大なプロレタリア革命家毛主席が支持し、提唱しているものである。革命的教員・学生の全国的規模での大交流は、全国のプロレタリア文化大革命運動を一つに結びつけた。革命大交流は全国で毛沢東思想を伝えひろめ、毛主席のプロレタリア革命路線を宣伝し、プロレタリアートの革命的隊列を組織し、ブルジョア反動路線に大きな衝撃をあたえた。

だが、ブルジョア反動路線をあくまで固執する極少数のものは、自分たちの失敗に甘んじてはいない。ブルジョア反動路線にはその社会的基礎がある。それは主としてブルジョアジイであり、そのほか一群の十分に改造されたいない地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分子である。ブルジョア反動路線は党内にも一定の市場をもっている。それは、世界飢が改造されていないか、または十分に改造されていない一部の幹部である。ブルジョア反動路線をあくまで固執する極少数のものは、この反動路線の社会的基礎と党内におけるその影響を利用して、風波をたてている。かれらは表ではあの手、裏ではこの手と、いろいろな手段をつかつて、プロレタリア革命路線に対抗し、ブルジョア反動路線にたいする広範な革命的大衆の批判を破壊しているのである。

ブルジョア反動路線をあくまで固執する極少数のものもつとも重要な陰謀術策は、大衆をそそのかして大衆とたたかわせることである。かれらは、かれらにだまされている一部の大衆や大衆組織をひそかに組織したり、あやつたりして革命をおさえつけ、自分たちを保護し、武闘を挑発し、混乱をひきおこそうとくわだてている。かれらはまたデマをとばし、黒白を転倒させて、かれらがひそかにおこなっているこれらの悪事をプロレタリア革命派におしつけ、革命派に「ブルジョア反動路線」のレッテルをはりつけている。かれらはひきつづき、

闘争のほと先を革命的大衆にむけ、プロレタリア革命路線にむけ、プロレタリアートの革命司令部にむけようとかわだてているのである。

わが党が毛主席の階級路線にしたがって、プロレタリア文化革命の隊列を組織していたちようどそのとき、ブルジョア反動路線を固執する極少数のものは、「おやじが英雄なら、息子も好漢だ、おやじが反動なら、息子もろくでなしだ」というスローガンを利用して、一部の学生をまどわし、分派をつくり、階級戦線を攪乱した。このスローガンは、はじめは一部の純真な青年がうち出したものである。かれらは考え方にある程度の一面性があったために、資本主義の道をあゆむ党内の一握りの実権派が革命的幹部の子女や労働者・農民の子女を排斥し、かれらに打撃をあたえることに反対するという正しい前提に立ちながら、他の極端に走ってしまった。こうした純真な青年にたいしては、じゅんじゅんと説きかせ、懇切にみちびいてやらなければならぬ。わが党は、当時、このとおりにやったのである。ところが、ブルジョア反動路線をあくまで固執するものは、下心をもつてこのスローガンを利用し、極少数の学生（そのなかには、十分に教育されていない幹部の子女もいた）をあざむき、かれらを邪道にひきいれて、他の部分の学生と対立させようとした。こうして、「おやじが英雄なら、息子も好漢だ、おやじが反動なら、息子もろくでなしだ」というスローガンはプロレタリア革命路線に対抗するものとなったのである。ここで指摘しておかなければならないのは、下心のあるものがこのスローガンを利用したのは、実質的には、搾取階級の反動的な血統論を大いに宣伝したことである。封建地主階級も「竜は竜を生み、鳳は鳳を生む、ねずみの生んだ子は地に穴をあける」とさかんに宣伝しているが、それはこうした血統論にほかならない。これは徹頭徹尾反動的な史的観念論である。

ブルジョア反動路線をあくまで固執する極少数のものは、大衆のまえで自己批判をおこなわず、かれらのために「反革命分子」、「反党分子」、「ニセの左派、真の右派」、「野心家」などに仕立てあげられた革命的大衆のえん罪をそそいでやらず、革命的大衆をつるしあげるための資料を大衆のまえで焼却しないばかりか、逆に「秋のとりのいれ後に清算するという論調」を大いに宣伝し、いままお革命的大衆を「右派」として処分すると広言している。このような論調は、やがて反撃、報復に出るぞ、ということにはほかならない。プロレタリア革命派は清算をおそれるものではない。「秋のとりのいれ後に清算する」という論調も革命的大衆をおどかすことはできない。このような論調をまきちらしたのは、党と革命的大衆にたいして、またも新しい債務を負ったのである。

革命的大衆はかれらのこの債務をかならず清算するであらう。
ブルジョア反動路線をあくまで固執する極少数のものこうした種々さまざまな演技は、みごとに、かれら自身を暴露している。かれらが凶暴にやればやるほど、広範な大衆はますますブルジョア反動路線とはなにかを認識するようになり、どうしてもこのブルジョア反動路線を暴露し、批判するために立ちあがらなければならないと考えるようになるのである。

ブルジョア反動路線を固執するこの連中が、なぜ、一時期一部の大衆をだますことができたのだろうか。それは、かれらが大衆の間にある毛主席と党の崇高な威信を利用したからであり、かれらが偉大な功績をわがものに、自分たちを党の化身だといくるめ、自分たちの言動を党の指導だといくるめ、党への信頼をかれら自身への信頼だといくるめたからである。かれらはまた、原則などということの問題にせず直接の上級の指導に無条件で服従しなければならぬという論調をとくに宣伝した。このような論調は、実際には、盲目的服従を提唱

し、奴隸主義を提唱するものであり、マルクス・レーニン主義に反対し、毛沢東思想に反対するものである。一九四二年の整風運動で、思想の面から王明路線を解決するにあたって、毛主席はすでにつきのよう指摘している。

「共産黨員は、どんな事がらについても、なぜかという問いを発して見る必要があり、なんでも、自分のあたまで綿密に考え、それが実際と合致するかどうか、ほんとうに道理があるかどうかを考える必要があり、絶対に盲従すべきではなく、絶対に奴隸主義をとるべきではない。」

毛主席はつねに、革命に危害をおよぼす誤った指導にたいしては、断固としてそれをこばむべきであって、無条件にうけいれてはならない、とわれわれに教えている。事実、今回の文化大革命のなかで、広範な革命的教員・学生と革命的幹部は誤った指導にたいして、広範にわたってこれをこばんだ。

マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の正しい指導を断固としてうけいれ、実行し、革命に危害をおよぼす誤った指導をあくまでこばみ、奴隸主義に断固として反対することは、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想で武装したプロレタリア政党の政治原則であり、また、組織原則でもある。すべての真の共産黨員は、断固として、忠実に、なにもをもおそれることなく、この原則どおりに事をおこなうとともに、大衆にたいしてこの原則を正しく宣伝しなければならぬ。この原則が広範な革命的大衆と広範な革命的幹部によって把握されたならば、ブルジョア反動路線をあくまで固執するものや資本主義の道をあゆむ党内の一握りの実権派は、武装を解除させられるであろう。

第八期中央委員会第十一回総会がひらかれてから、すでに四ヵ月余りになる。毛主席とその戦友たちは、路線の誤りを犯した同志にたいして多くの政治・思想工作をおこなってきたし、広範な革命的大衆もかれらにたいして批判と教育をおこなってきた。一部の同志はすでに誤りを改めたし、一部の同志はいま誤りを改めつつある。これは歓迎すべきことである。いまなお、誤りを改めようとしぬものには、そこはがけつぶちだ、馬を止めよ、と一喝してやらなければならぬ。もしも、かれらがひきつづきブルジョア反動路線を固執し、党と大衆にたいして二面的手口をもてあそぶならば、かれらは資本主義の道をあゆむ実権派と合流することになるか、あるいは、かれら自身もともと資本主義の道をあゆむ実権派であったことを証明することになるであろう。

今回の二つの路線の闘争は、ひじょうに深刻なものである。数ヵ月にわたって展開されてきたブルジョア反動路線を批判する大衆運動は、きわめて大きな勝利をおさめ、なん億もの大衆にこの闘争の本質を理解させた。毛主席に代表されるプロレタリア革命路線は、思いきって大衆を立ちあがらせ、資本主義の道をあゆむ党内の一握りの実権派とブルジョアジーの反動的学術「権威者」をたたきつぶし、搾取階級のあらゆるものを取りのぞこうとしている。ところが、ブルジョア反動路線は大衆をおさえつけ、資本主義の道をあゆむ党内の一握りの実権派とブルジョアジーの反動的学術「権威者」を保護し、搾取階級のあらゆるものを保護しようとしている。一方は社会主義革命を最後までおしすすめようとし、他方は資本主義の旧秩序を保持しようとしている。つまり、一方は変革しようとし、他方は保持しようとしているのである。これこそ、二つの路線のたたかひの本質なのである。

ブルジョア反動路線にたいする大衆的批判の深化、発展にともない、毛主席のプロレタリア革命路線はいちだ

んと広範な大衆によって把握され、わが国のプロレタリア文化大革命は新しい局面をしめすにいたった。この新しい局面の主要な特徴はつぎのとおりである。

広範な労働者、農民が立ちあがった。かれらはさまざまな阻止力を突破して、自分たちの革命的組織をつくり、プロレタリア文化大革命運動に身を投じている。

革命的学生の力は大きく発展し、強化され、向上した。一部の革命的学生は、工場にいき、農村におもむき、労働大衆と結びつきはじめている。

党と政府機関の革命的幹部は、ブルジョア反動路線をあくまで固執する責任者への反逆に立ちあがっている。大衆運動の規模はいつそう大きくなった。闘争の内容はいつそう豊かになった。労働者のなかから、農民のなかから、学生のなかから、機関幹部のなかから、いつそう多くの革命的闘將があらわれている。資本主義の道をあゆむ党内の一握りの実権派は、いつそう孤立の度を深めている。

わが国の現代史における文化大革命運動はみな学生運動からはじまって、労働運動や農民運動に発展し、革命的な知識人と労働者、農民との結合に発展している。これは客観的な法則である。わが国現代革命史の序幕となつた五・四運動もそうであつたし、わが国の社会主義革命を新しい段階におしすすめるプロレタリア文化大革命運動もまたそうである。一九六七年には、わが国のプロレタリア文化大革命はこの客観的な法則にしたがつてさらにくりひろげられるであろう。

一九六七年は全国的規模で、全面的に階級闘争がくりひろげられる年となるであろう。

一九六七年は、プロレタリアートがその他の革命的な大衆と団結して、資本主義の道をあゆむ党内の一握りの

実権派と社会の妖怪変化にたいして総攻撃をくりひろげる年となるであろう。

一九六七年は、ブルジョア反動路線がさらに深くつっこんで批判され、その影響が一掃される年となるであろう。

一九六七年は、闘争、批判、改革が決定的な勝利をおさめる年となるであろう。

一九六七年、全党および全国の革命の大衆の前におかれている政治的任務は、主としてつぎのようなものである。

第一に、工場と農村において、毛主席と党中央の、「革命に力をいれ、生産をうながそう」という指示にしたがい、大いにプロレタリア文化大革命をくりひろげ、人の思想の革命化をうながし、工農業生産の発展をおしすすめなければならない。

工場と農村のプロレタリア文化大革命は、すべて文化革命の十六カ条にもとづいておこなひ、あくまで大衆に自分で自分を教育し、自分で自分を解放し、自分で立ちあがって革命をやるようにさせなければならない。いかなる人もそれを一手にひきうけて代行してはならない。四清運動（訳注：政治を清め、思想を清め、組織を清め、経済を清める運動）は文化大革命のなかに組み入れて、文化大革命のなかで、四清の問題と四清再審査の問題を解決しなければならない。

工場と農村のプロレタリア文化大革命はきわめて重要なものである。労働者と農民はプロレタリア文化大革命の主力部隊である。かならず労働大衆を思いきり立ちあがらせて、鉱工業企業と農村における、資本主義の道をあゆむ党内の一握りの実権派を闘争によってうち倒し、いつさいの資本主義、修正主義のふるいものを取りのぞ

かなければならない。このようにしてはじめて、資本主義復活の根を抜き去ることができるのである。

毛主席は抗日戦争の初期のころにつきのようになっている。「全国人口の九〇パーセントの労働大衆を立ちあげてこそ、帝国主義にうち勝つことができ、封建主義にうち勝つことができる。」これと同様に、今日においても「全国人口の九〇パーセントの労働大衆を立ちあげてこそ、資本主義の道をあゆむ党内の一握りの実権派にうち勝つことができ、プロレタリアートとブルジョアジーのどちらがどちらに勝つかという問題を解決することができるのである。

プロレタリア文化大革命は、かならず機関、学校、文化界から、鉱工業企業、農村にまで発展させ、毛沢東思想にすべての陣地を占領させなければならない。もしも運動が機関、学校、文化界にとどまるならば、プロレタリア文化大革命は中途で挫折するにちがいない。

鉱工業企業と農村におけるプロレタリア文化大革命の大々的な展開をはばむいつさいの論調はみな誤りである。一部の頭のはっきりしない人たちは、革命と生産を対立させ、文化大革命をやりだすと生産のさまたげになると考えている。したがって、かれらは生産にだけ力をいれ、革命には力をいれようとしない。これらの同志たちは、なんのために畑をたがやし、布を織り、鋼を製錬するのかを考えていない。社会主義を實行するのか、それとも資本主義を實行するのかを考えていない。国際的なプロレタリアート独裁の歴史的経験は、われわれがプロレタリア文化大革命を成功裏になしとげてはじめて、われわれの経済建設が、社会主義、共産主義の道にそって前進するのを保証できるということをわれわれに教えている。プロレタリア文化大革命のなかであらわれた多くの事実が立証しているように、文化大革命が成功裏におこなわれているところではいずれも、生産はひじょうに大

きく発展している。革命は社会的生産力の発展を促進するだけであって、社会的生産力の発展をさまたげることではない。これはマルクス・レーニン主義、毛沢東思想の真理である。

また、極少数の人たちは、生産に力を入れるという口実のもとに革命をおさえつけようとしている。かれらは、うわべは生産に関心をもっているように見えるが、その実かれらに関心をもっているのは自分たちの官職であり、ブルジョアジーのふるいものを温存することであって、革命が自分の頭上におよんでくるのを恐れているのである。大衆が立ちあがって大いに革命をやるようになると、かれらは、一時かれらにだまされている一部の人たちを扇動して、生産を停止させ、革命の大衆に立ちむかわせている。なかには、地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分子と結託して、悪質な陰謀をすすめているものさえいる。これは、かれらが実行しているのがブルジョア反動路線であり、はなはだしい場合には、かれら自身が資本主義の道をあゆむ実権派であるか、または、いままさにその実権派になろうとしていることを暴露している。

鉱工業企業と農村におけるプロレタリア文化大革命の大衆運動は、さえないことのできない歴史的潮流である。この潮流をさえないすべての論調、この潮流をさえないものはみな革命的大衆によってゴミ箱に投げこまれるであらう。

第二に、学校や文化分野の各界におけるプロレタリア文化大革命にたいしては、革命的な教員・学生、革命的な知識人が計画的に組織的に工場、農村におもむいて、広範な労働大衆と結びつくことを大いに提唱しなければならない。

毛主席は、一九三九年に発表した『五・四運動』と『青年運動の方向』のなかでつぎのように指摘している。

「知識人がもし労農民衆と結びつかないとすれば、なに一つできるものではない。知識人が革命的か、非革命的か、反革命的かの最後のわかれ目は、かれらが労農民衆と結びつくことをぞみ、しかもそれを実行するかどうかにある。」

「全国の知識青年や学生が強力な部隊を形成するには、どうしても広範な労農大衆と結びつき、かれらと一体にならなくてはならない。これはなん億人という部隊ではないか。この大部隊があつてはじめて、敵の堅固な陣地を撃破できるし、敵の最後のとりでを撃破できるのである。」

毛主席がここで解明しているのは普遍的な真理である。労農大衆と結びつくことは、新民主主義革命の時期における青年運動の方向であると同時に、社会主義革命の時期における青年運動の方向でもある。

今日においてもそのとおりである。「知識人が革命的か、非革命的か、反革命的かの最後のわかれ目は、かれらが労農民衆と結びつくことをぞみ、しかもそれを実行するかどうかにある。」労農大衆と結びついてこそ、プロレタリアートの世界観を本當にうちたてることができ、名実ともにプロレタリアートの知識人になることができるのである。

今日においてもそのとおりである。知識青年や学生が工場、農村におもむいて、労農大衆と結びつき、かれらと一体となつてはじめてなん億人の大部隊を組織して、資本主義の道をあゆむ党内の一握りの実権派が根をおろしている陣地を攻め落として、プロレタリア文化大革命の最終的勝利をかちとることができるのである。

工場や農村におもむくことと、自分たちの所属単位の闘争、批判、改革をおこなうことを合理的にあん配しなければならぬ。前の段階における自分たちの所属単位の闘争にたいしては、必要な総括をおこない、文化大

革命における二つの路線の闘争の本質をさらにはっきりさせ、原則にかかわる是非をはっきりと区別し、工場、農村におもむくにあつたての態度と認識をたざなければならぬ。

工場や農村におもむく場合には、謙虚な態度で労農大衆に学び、すすんで小学生になり、労働者、農民といつしよに労働し、いつしよに学習し、いつしよに文化大革命の問題を討論し、毛主席のプロレタリア革命路線を宣伝し、ブルジョア反動路線を批判しなければならぬ。そして目を下にむけ、深く掘りさげて調査研究をおこない、その革命的な組織と結びつかなければならず、一人よがりになつたり、一手にひきうけて代行したりしてはならない。

工場や農村におもむくことは自分たちの所属単位の闘争、批判、改革の任務を達成するための重要な条件である。学生、知識青年が労働者・農民の烈火のような大衆運動のなかに身を投じて、自分たちの思想を改造すれば、資本主義の道をあゆむ党内の一握りの実権派にたいしてより力づよい闘争をおこなうことができ、大弁論のなかの是非についてよりいっそうはっきりした認識をもつことができるのである。工場や農村においてプロレタリア文化大革命を徹底的に実現しなければ、上部構造に属する学校や文化各界の革命も徹底的に達成することはできない。工場、農村の実状を理解し、労働者、農民の声を聞かなければ、実際に即した教育制度、教育内容、教学方法の改革をおこなうことはできず、効果的にわれわれの文化団体と文化工作にたいする改造をおこなうことはできず、本當に、完全に労農兵に奉仕することはできない。

第三に、プロレタリアート独裁という条件のもとでの大民主を十分に発揚することである。このような大民主とは、つまり毛沢東思想の統率のもとで、なん億という大衆を立ちあがらせて、社会主義の敵に総攻撃をかけ、

同時に、また各級の指導機関と指導的幹部にたいする批判と監督をおこなわせることである。このような大民主の社会的気風をつくりあげることが、プロレタリアート独裁を強固にし、資本主義の復活を防止するうえで、重要な、深遠な意義をもっている。

プロレタリア大民主は、毛主席の大衆路線の新しい発展であり、毛沢東思想がなん億という大衆と結びつく新しい形式である。このような大民主は、大衆が自分で自分を教育し、自分で自分を解放する最良の方法である。広範な大衆は、このような大民主の運動のなかで、毛沢東思想を武器として、敵味方をはっきりと区別し、是非をはっきりと区別するのである。このような大民主は、毛沢東思想を学習する最良の学校である。

毛主席はわれわれに「民主というものは、時には目的のようにみえるが、実際には、一種の手段にすぎないものである」と教えている。われわれが大民主というこの手段をつかって達成しようとする目的は、プロレタリア文化大革命を実現させ、社会主義事業を発展させることにある。プロレタリアートとその他の勤労人民の利益にそむき、社会主義にそむき、毛主席に代表されるプロレタリア革命路線にそむくならば、プロレタリアートの大民主などありうるはずがなく、少数のものが革命的大衆を抑圧することになるだけである。

われわれの提唱する大民主は、毛沢東思想による集中的な指導のもとでの大民主である。大衆のあいだに異なった意見がある場合、毛沢東思想の指導のもとに、事実をあげ、道理を説く方法で討論をおこなうべきであつて、強制的なやり方で他人をおさえつけてはならない。人民内部で、もし自分だけ意見を發表するのを許し、他人に異なった意見を發表するのを許さないならば、それはプロレタリア大民主の原則にそむくことになる。下心をもった極少数の悪質分子が、かれらにだまされて大衆を扇動して暴力をふるわせ、革命をおさえつける

のは、プロレタリアートの大民主を破壊し、プロレタリア文化大革命を破壊するものであり、またプロレタリアート独裁を破壊するものである。

毛主席はわれわれに、人民内部では民主を實行し、反動派にたいしては独裁を實行するよう教えている。プロレタリアート独裁は、プロレタリア大民主の實行を保障するものである。また、プロレタリア大民主は、プロレタリアート独裁を強固にするものである。プロレタリア大民主がなければ、プロレタリアート独裁はブルジョアツリ独裁に変わってしまう危険がある。プロレタリアート独裁がなければ、プロレタリアートの民主はありえず、大民主はいうまでもなく、小民主さえありえない。プロレタリア文化大革命のなかで、われわれのプロレタリアート独裁の機構は、かならず断固として、なんら動揺することなく、人民の民主的権利を保障し、大いに意見を出し、大いに見解をのべること、大字報をはり出すこと、大弁論、大交流が正常におこなわれるよう保障しなければならない。殺人、放火、毒物散布、計画的な交通事故による謀殺行為、外国との内通、国家機密の窃取、破壊活動などの確証ある反革命の現行犯にたいしては、独裁を實行し、法律にもとづいて処分しなければならない。革命的な大衆はだれでも、われわれの国家の独裁機構に協力して、これを助け、これを監督して、プロレタリア大民主を保障する任務を遂行しなければならない。反動的な思想をもってはいるが、違法行為のない右派分子にたいしても、やはり大衆が事実をあげ、道理を説く方法で、かれらと闘争しなければならない。

第四に、ブルジョア反動路線にたいする大衆的批判をひきつづきくりひろげることである。

プロレタリア文化大革命のなかでブルジョア反動路線があらわれたのはけつして偶然ではない。わが国が社会主義革命の段階にはいつて以来ずっと、毛主席に代表されるプロレタリア革命路線と、ブルジョア反動路線との

闘争が存在し、社会主義を實行するか資本主義を實行するかの闘争が存在してきた。プロレタリア文化大革命のなかで反動路線をうち出したものは、かれらの、ブルジョアジーの反動的な立場をいっそう暴露したにすぎない。

鉱工業企業において、農村において、大・中・小学校と文化各界において、党・政府機関において、各分野において、ブルジョア反動路線に反対して、それをうち倒し、その影響を一扫して、人びとが真に思想的に問題を解決するには、まだ多くの掘り下げた、綿密な仕事が必要ならなければならない。この点について、われわれははつきりとした認識をもたなければならない。

今後、プロレタリア文化大革命の労働運動のなかで、農民運動のなかで、学生運動のなかで、また各戦線で、ブルジョア反動路線を大いにうち破り、毛主席のプロレタリア革命路線を大いにうち立てなければならない。これはプロレタリア文化大革命を最後までやりぬくためのカギである。

党・政府機関の革命的幹部は、わずらわしいさまざまなおきて、革命を束縛する各種のワケをうち破り、大衆のなかへはいり、労働者、農民、革命的學生といっしょになってブルジョア反動路線を批判し、資本主義の道をあゆむ党内の一握りの実権派と闘争しなければならない。プロレタリア文化大革命の大衆運動をつうじて、われわれの党・政府機関のプロレタリア的革命化を徹底的に実現させなければならない。

ブルジョア反動路線を批判するなかで、路線のあやまちを犯した同志にたいしては、毛主席の教えにもとづいて、「前のあやまりを後のいましめとし、病をなおして人を救うという方針を實行して、思想的にはっきりさせるし、また同志も結集させるといふ二つの目的を達しなければならない」。正しい道にもどろうとせず、あやまちを固執し、うわべでは従うようにみせながら、かげにまわって反対している極少数の二股分子は、かならず人

民大衆にうち倒されてしまうであろう。それは自業自得である。

中国共産党は偉大な、光栄ある、正しい党である。資本主義の道をあゆむ党内の実権派はほんの一握りにすぎない。圧倒的多数の黨員と幹部はよい人びとであり、革命を望んでいる人びとであつて、このたびのプロレタリア文化大革命の大衆運動の試練と鍛練を経て、いっそうしつかりとしてくるであろう。

革命的左派の隊列は、ブルジョア反動路線を批判する闘争のなかで、毛主席の著作を實際と結びつけて学び運用することにつとめ、向上をはかり、整頓をおこなわなければならない。革命的左派の隊列は、毛沢東思想を基礎に団結を強めなければならない。また、毛主席の戦略・戦術思想をいっそうしつかりと学び、把握して、大多数を獲得し、結集させることにたけ、頑迷な敵を最大限に孤立させなければならない。闘争のなかで敵味方の矛盾と人民内部の矛盾とを厳格に区別し、「反党・反社会主義の右派分子と、党と社会主義を擁護してはいるが、若干の誤つたことを言ったことがあるとか、若干の誤つたことをしたことがあるとか、あるいは若干のよくない文章を書き、よくない作品をつくつたことがあるとかいうものとは、厳格に区別するように注意しなければならない」。ブルジョアジーの反動的な学閥、反動的な「権威者」と、一般的なブルジョア的學術思想をもつていないものとは、厳格に区別するように注意しなければならない。運動をつうじて、最後には、九五パーセント以上の幹部を団結させ、九五パーセント以上の大衆を団結させなければならない。

資本主義の道をあゆむ党内の一握りの実権派、ブルジョア反動路線を固執している極少数の頑迷分子は、なおも新しい手口をもてあそび、ひきつづき攪乱活動をおこなうであろう。すべての反動派と同じように、「かれらが革命的人民にたいしておこなうさまざまな迫害は、結局、いっそう広い、いっそう激しい人民の革命を促すだ

「である」。いうまでもなく、すべての反動派と同じように、かれらもハリコの虎である。われわれは、毛主席が教えているように、戦略的にはかれらをべつ視し、戦術的にはかれらを重視して、かれらにたいするたゆみない闘争を堅持しなければならない。

われわれは、プロレタリア文化大革命のなかで、プロレタリアートとブルジョアジーとの階級闘争、社会主義と資本主義との二つの道の闘争、プロレタリア革命路線とブルジョア反動路線との闘争をカナメとし、大いに意見を出し、大いに見解をのべ、大字報をはり出し、大弁論をおこなうことと結びつけて、毛沢東思想の偉大な旗を高くかかげようという林彪同志のよびかけにさらにつばにこたえ、毛主席の著作を實際と結びつけて学習運用する大衆運動をいちだんとくりひろげ、ひじょうにプロレタリア化した、ひじょうに戦闘的な革命の隊列を鍛えあげ、これを強大なものにし、つぎつぎと新たな勝利をかちとらなければならない。

偉大な毛沢東思想の旗のもとに、

労働者階級は団結し、

労働者階級は貧農・下層中農およびその他の勤労者と団結し、

すべての勤労者は革命的學生、革命的知識人、革命的幹部と団結し、

各民族人民は団結し、

全国的な、全面的な階級闘争をくりひろげて、

プロレタリア文化大革命を最後までやりぬこう！

偉大な教師、偉大な指導者、偉大な統帥者、偉大な舵手毛主席万歳！

中国のプロレタリア文化大革命（第九集）

1967年 初版発行

定価 30 円

出版者

外文出版社
(北京阜成門外百万莊)

発行者

中国国際書店
(北京 P. O. Box 399)

番号: (日)3050-1610

3-J-803P
00016

